

# ラジオもテレビもない時代 唯一の楽しみが「まつり」だった

村にラジオもテレビもなかった70年前の昭和13年、まつりは人々にとって唯一の楽しみだった。まつりの数カ月前には、青年らが仕事も投げ出し、毎夜山車づくりで没頭したという。昭和初期、子どもから大人までが心底まつりを楽しんだ、村にはそんな歴史があった――。



昭和13年、旧の8月15日に行われた「八幡宮まつり」の写真。中央の山車は当時の有志による手作り、これが自作山車の始まりだったという

## 大切に保管されていた 1枚の写真

上の写真は今から70年前の昭和13年「八幡宮まつり」の写真だ。思い思いに着飾った子どもから大人たち。山車の中央には一体の人形とサクラの木。町並みに現在の面影はないが、後ろにそびえる宇留部山は今と少しも変わらない。

撮影場所は現在の高橋薬局（中央区）辺り。写真の裏には昭和13年旧8月15日と書かれてあり、上区の根岸弘さん（故人）宅に大切に保管されていた。

## 昭和13年、初めて 自作の山車が運行された

ふだいまつりは明治末期、中央区にある八幡宮の縁日（旧暦8月15日）に、「奉納相撲大会」として始まったのが最初といわれているが、残念ながら確たる証拠は残っていない。

時は流れ、青森県八戸市や久慈市で行われていた山車まつりに影響を受けた三船仁太郎さんが「村でも山車を作ろう」と村の青年たちに声を掛け、自分たちで山車を作り始めた。それが昭和13年、仁太郎さん37歳の時だった。山車作りは当時久慈市に仁太郎さんのいとこがいて、その人から指導を受けたという。

中央区の三船孝子さん（78）は「この写真（上）は私が小学校3年生のときでした。小さいころここ（三船製菓）の近所にいたのでよく覚

山車の上でバチを高く上げ、大太鼓の左側に立っている青年が、中央区の野崎幸太郎さん（87）だ。この写真を持って野崎さんを訪ねた。

「よく見つけたねー。大太鼓の左側は確かに私だよ。山車の題目は『児島高德』だったかな？ 私は当時17・18歳だったと思うよ。三船仁太郎さん（故人）というまつり好きの人がいてね、仁太郎さんや及川玄雄さん（故人）たちが中心になって山車を作っていたなあ。これが現在の山車まつりの始まりだったと思うねー」。

野崎さんは写真を手に遠い記憶を鮮明に話してくれた。

えでいますん。嫁いでのらごどだども、おじいさん（仁太郎さん）たちは、店の裏の倉庫でおまつりの2カ月ぐらい前から毎晩集まっていた。当時ラジオもテレビもない時代で、唯一の楽しみが山車まつりだったよー」と懐かしそうに話してくれた。

写真の中央付近に写っている仁太郎さんの3男・三船朋久さん（75）上区）は「この写真は自分が小学校に入る前だ。たぶんこれが最初にした山車だね。子どものころ、山車作りを見に行くと、ちよっかいをだしたら人形師に『うるさい』とおこられたよ」と笑った。

しかし、その後村のまつりはどのような変遷をたどってきたのか？ まつりに関する資料もほとんどなく、当時を知る人も高齢となったが、次ページでは当時のまつりにかかわった人たちの貴重な話と、現在に至る経過を振り返る。



当時のまつりの中心的存在だった三船仁太郎さん。大のまつり好きで山車は三船さんの自宅の裏で作っていたという



右の写真を見て懐かしむ野崎幸太郎さん。「三船菓子屋さんの裏で、三船仁太郎さんと及川玄雄さんが、一生懸命山車を作っていた記憶がある。竹を切って和紙を張って作っていたよ」と振り返る



当時の稚児行列は、はんにんにハチマキ、前掛けをして金棒を持つという衣装だった

※児島 高德（こじま たかのり）生没年未詳。鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて活躍した備前国出身の武士。軍記物語の『太平記』に登場する。